

雲林寺報第37号

慈恩



令和6年8月発行

残暑お見舞い申し上げます

暦の上では秋とは申せ暑い盛りであることは言うまでもありません。近年の気候変動は、世界的にも問題視されており、その影響は、異常気象や大気汚染、メンタルヘルスを脅かすストレスによつてすでに健康に被害を及ぼしています。日常を暮らす我々の生活の中に健康第一という言葉をよく耳にしますが、人は誰も健康で幸福でありたいと願っています。しかしもしも、他人はともかく自分だけは幸福でありたいと願っているとしたら、その人は絶対に幸福にはなれません。争い、憎しみ、そねみといったすべ

この世の不幸の元は、みな人間が自分の幸福だけを願うその利己心から起きるものだからであります。高祖道元禅師様は修証義という經典の中で

自未得度先度他の心を発すべし

とおさとしになられました。それは、自分の幸福はさておいても、世の為に尽くそうという仏心に生きることがあって、社会的地位や人生の運不運にかかわらず、その人が仏心をおこしたその時にそこに本当の幸福があるという教えを説かれています。

その幸福とは、いつくしみ合い、よろこび合い、感謝し合う、美しい心を持つことです。

光陰は矢よりも迅かなり

今年も残り四ヶ月、壇信徒す

べての皆様が幸福であることを切に祈念申し上げます。



護持会たより

日頃より雲林寺護持会の活動にご理解を賜り誠にありがとうございました。世話人の交代がございましたので御報告させていただきます。

大津地区の櫻井敏雄様が退任され、新任に櫻井雅和様、北軽井沢地区の宮田満様が退任され、西山義夫様が任命されました。櫻井敏雄様、宮田満様には長きに渡り護持にご尽力頂き感謝申し上げます。六月二十四日、浅間酒造にて通常総会がございました。



大津 櫻井雅和様



北軽井沢 西山義夫様



(収入)	
前年度繰越金	858,804
会費(世話人集金)	1,310,000
会費(町外檀家)	485,500
雑収入	10
	<hr/>
	2,654,314

(支出)	
宗務費	612,790
通常総会	160,150
役員総会	16,830
梅花流助成金	100,000
慶弔費	120,000
事務費	23,099
雑費	7,902
	<hr/>
	1,040,771

収入合計	2,654,314
支出合計	1,040,771
次年度繰越金	1,613,543

積立金	6,000,000
-----	-----------

三十世住職 轟 省吾

第十四回雲林寺護持会親睦ゴルフコンペのお知らせ
十月十四日(月)
壇信徒の皆様のご参加をお待ちしております。



2月3日 節分祈禱会

季節の変わり目には気圧や気温の急な変化によって体調を崩す方が多くあります。昔においても例外ではなく、季節の節目にあらわれる体調の変化を、邪気が取り付くせいだと考えたのでしょう。そこで、とくに1年の始まりともいえる立春の前日に祈禱をすることで、以後1年間の無病息災や家内安全を祈ったのです。皆様にとって福多き年であるよう、お祈り致しました。



活動報告

令和6年前期



12月31日 除夜の鐘

お寺では1年間を振り返って感謝の気持ちを表す「除夜法要」という、その年最後の法要を勤めます。除夜の鐘を鳴らすのも、その法要の一つ。大晦日から新しい年への引継ぎを行う大切な儀式なのです。

3月20日 草木原観音堂角塔婆入魂式

三原郷札所16番でもある草木原観音堂の角塔婆に観音経（かんのんぎょう）の一節を書かせて頂きました。



（観音経より一節）
廣大智慧観念彼観音力
 観音菩薩を信じ、一心に「観音力」と念ずれば、観音様が現われてその力を以って救って下さるでしょう。

1月2日 新年祈禱会

新年祈禱会では檀家様全てにお配りする御札、お守りの御祈禱をします。御祈禱しました御札は、年頭のご挨拶まわりで各檀家様へお届けし、遠方の方は、郵送いたします。

今年の新年祈禱会では参加された皆様に「般若心経」をご一緒にお唱えして頂きました。



海外よりご来山



6月24日、台湾よりバレーボール選手の団体、チャイニーズタイペイの皆様が来山されました。台湾電力がスポンサーとなるナショナルチームです。

7月16日、長野原町の姉妹都市であるリビングストーン市（米国・モンタナ州）より交換留学生と引率の方10名が来山し、御焼香や書道、箏の演奏を体験されました。



4月27日 大般若法要

大般若会は、雲林寺の行事の中で最も動きのある行事ですから、是非多くの方に観て頂きたい法要です。

全600巻に及ぶ**大般若波羅蜜多經**（だいはんにゃはらみったきょう）というお経の書かれた本を使って檀信徒皆様の御安寧を祈願をする法要です。



お寺の灯音

あかり



電気照明が無かった昔、儀式を行う際ろうそくの火が使われていました。ろうそくの温かみのある火を眺めていると、自然と私達の心も落ち着くものです。時代は変わり、周囲の環境が明るくなった現代、お寺の照明はろうそくだけでは暗くなりすぎました。

特にお寺に慣れていない人は、暗すぎるのは不安に感じるし、そもそも、うす暗いお寺にはあまり近づきたくないと思います。温かみがありながら、暗すぎず、明るすぎないろうそくのような灯（あかり）

ろうそくの灯りはあの世とこの世の架け橋になってくれます。お盆に仏壇にろうそくの火を灯すと、ご先祖様や故人が迷うことなく現世に帰って来られると考えられています。

有名な仏教行事である「精霊流し」は、お盆に戻って来た先祖を再び浄土に無事に送りだすためのものです。

また、ろうそくの火は、光に照らし出されてあらわになった私達の邪念や煩惱を払い去ってくれると言います。

ろうそくの火の暗闇を照らす力は邪気を払い、私達の周囲の不浄や汚れを浄めてくれるのです。

お寺にあるべき灯（あかり）を求め、この度、本堂の照明を一新致しました。



←スポットライトを当てて、段階的な光を作ってみました。

照明の向きを変える事ができるので、法事の際は御本尊様、亡くなられた故人様の遺影にスポットライトを当てます。



↑用途により灯の色味を変える事ができます。

杉の枝を伐採音

一月、樹齢約二〇〇年になる参道の杉の枝を伐採し、参道が明るくなりました。



感謝録音

田村俊樹様

本堂の照明一式をご寄付いただきました。ありがとうございました。

梅花流たより

四年間の休会により久しぶりとなった梅花特派布教巡回が六月十一日、雲林寺を会場に開催されました。教区長の應永寺様をはじめ、第六教区の御寺院様、奥様、講員の皆様のご協力を頂き、九時半より十五時まで行われました。この勉強会は毎年、師範の先生の個性的な教えが楽しいのですが、今回の大野道源師範（島根県桐岳寺住職）におかれましては、喉の調子が思わしくなく、病院にて治療中とのことでした。自分の声が出ずらくなって、心からその人の辛さ、痛みを理解することができたとお話してくださりました。先生のお話しに講員さんも共感し、この勉強会が終わることをとても残念に思いました。また、いつの日かどこかで目にかかると聞いて嬉しかったです。先生の朗々としたお声を聴講したいものです。残暑の折、七月八日高崎の向雲寺様にて上級者検定が行われ、雲林寺講より中沢至子様、渡辺しず子様、二級教範を受験され、見事合格なさいました。お二方、おめでとうございます。

轟 美代子



雲林寺梅花講員を募集しております。まずは見学からお気軽にお声かけ下さい！

雲林寺の鐘楼鐘音

しょう ろう どう



「夕焼け小焼けで日が暮れて、山のお寺の鐘が鳴る…」

ほとんどのお寺の境内には大きな鐘がぶら下がっています。お寺イコール鐘、のイメージがあるようです。

この大きな鐘を梵鐘（ぼんしょう）と呼び、梵鐘を撞く建物を鐘楼堂（しょうろうどう）と呼びます。ではなぜ、お寺には大きな鐘があるのでしょうか？

お寺はその昔、お年寄りや子どもたちのための福祉施設でした。朝と夕方に鐘を鳴らし1日の始まりと終わりを知らせていました。

学校のチャイムのような役割を果たし、時間を知らせるのがもともとのお寺の鐘の意味でした。

鐘の下にはなぜか大きな穴があります。

あきらかに意図的に造られた穴で、40cmの正方形です。

この穴は能楽堂の舞台にヒントがあります。



能楽堂の舞台の床下には、地面に数か所穴が掘られ、そこに大きな甕（かめ）がいくつも置かれています。これは舞台の音響条件を良くしていると言われています。

遠くまで音を響かせているのです。お寺の鐘も同じで、できるだけ音を遠くに響かせたいため、下に穴が掘られているのです。



鐘の上の表面には何やらデコボコした突起が付いています。これは「乳（にゅう）」と呼ばれます。

やはり梵鐘の音響効果を高めるためのものとされています。

煩惱の数と同じく「乳」が108個並べられています。

仏の髪の毛、螺髪（らぼつ）をかたどっています。

鐘そのものが仏様の姿と重なって見えませんか？ 鐘をつく「撞木（しゆもく）」が当たる部分を「撞き座（つきざ）」といいます。



その周りを飾っているのは、蓮（はす）の花です。蓮（はす）は、泥水の中でも美しい花を咲かせることから、煩惱に汚されることのない仏の悟りを表しているのです。

鐘の音は古くから仏の声だといわれてきました。低く重い響きが特徴です。

低い響きを生み出す秘密は、鐘の厚みにあります。7cmあります。

この厚みが低音を生み出すので鐘の表面には立体的に浮かび上がった文字がたくさんあります。

この文字は銘（めい）と言い、鐘が作られた由来やご利益などが記されています。



旧梵鐘は一八三六年九月、十八世古韻雲松大和尚の代、横壁の萩原太良右衛門氏の寄進で郡内勅許鑄物師（いものし）小島七右衛門の鑄造になる。爾末久しく大衆随喜の法器なりしが昭和十八年九月戦争の為納せり今講和成立に賛しここに再鑄するや衆亦佛祖の冥佑と檀徒の熱盛なる協力の賜りなり記して後世に傳ふ

昭和二十八年九月二十八世大慈提三謹識と記してあります。



総代 長谷川四郎 野口鶴三郎
山口壽足 櫻井武
櫻井東介 宮崎要三
世話人 萩原辰 萩原宗
萩原辰 野澤喜四郎
星河調一郎 野口弥三郎
唐澤元義 小林覚治郎
田村学 浅見岩雄
浅沼久太郎 湯本武雄
櫻井八重八 篠原仙太郎
篠原源治郎 篠原仙太郎

小林誠一郎
佐藤初枝
塩野要三
当時の壇信徒皆様のご協力があつての梵鐘、鐘なのです。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり

一度鳴ると必ずその音は儼かに消えていく。これぞ無常の響きである。平家物語では伝えられています。生まれては日々年老い、この世には同じであることが継続することはありません。